

大坪滋編

# 『グローバリゼーションと開発』

勁草書房 2009 年 xiii+499 ページ

の が み ひろ き  
野 上 裕 生

本書は名古屋大学大学院国際開発研究科のスタッフがまとめた開発研究の書物であり、教科書にも利用できるように工夫された興味深い書物である。評者もアジア経済研究所開発スクールなどで開発専門家養成に関わっており、本書のように開発研究の横断的課題を展望できる書物の公開を歓迎したい。

序章「グローバリゼーションと開発の主要課題」はグローバリゼーションの諸相を経済・政治・文化と、その根底にあるイデオロギー・制度・人・情報からとらえ、開発の主要課題を設定している。第1章「経済活動のグローバリゼーションと経済成長、不平等、貧困削減」はグローバリゼーションと成長・格差・貧困にまつわる史実を確認し、その上でグローバリゼーションの「光」を享受し、「影」の被害最小化のための開発マネジメントや貧困・格差のガバナンスを論じている。第2章「グローバリゼーションと貿易・開発政策」は開発途上国の貿易自由化と輸出促進政策を展望している。第3章「開発金融のグローバリゼーションと開発援助の将来」は途上国への資金の流れをまとめ、公的資金の役割について分析している。第4章「グローバリゼーションと多国籍企業・海外直接投資」は開発途上国向け海外直接投資の推移を分析し、この多国籍企業の活動によるグローバリゼーションが開発途上国にもたらす「光」と「影」を整理し、多国籍企業活動と海外直接投資の「戦略的かつ適切な管理をする必要性」（216ページ）について考察している。第5章「グローバリゼーションと資源の呪い」は資源に恵まれた国ほど経済成長実績が悪いという主張を批判的に検証したものである。第6章「グローバリゼーションとグローバル・ガバナンス」は歴史の流れとしてのグローバリゼーションと、それに一定の枠（ルール）をはめるグローバル・ガバナンスの関

係が途上国の開発に与える影響がテーマである。第7章「世界貿易機関（WTO）における『貿易と開発』——途上国の貿易の拡大に向けた対策の現状と課題——」はWTO体制を中心に途上国が貿易拡大を実現してグローバリゼーションの恩恵に与かるために必要な制度的対応を考察している。第8章「地球温暖化問題と国際協力」は京都議定書の問題点を解説している。第9章「グローバリゼーションと紛争・戦争」はグローバリゼーションが紛争や戦争をどのように変容させたのかを分析している。第10章「グローバリゼーション下の社会文化変容と開発」は開発に関わるグローバルな社会文化現象を要領よく解説し、また「開発プロジェクトと文化」といった実践的な問題も分析している。第11章「グローバリゼーションと途上国農村」はアグリビジネスのグローバリゼーションを通じた開発途上国農村の可能性と課題を経済と社会の両面から論じている。第12章「グローバリゼーションと国際人口移動——日系ブラジル人の事例を手がかりに——」は先進国側が途上国からの移民を積極的に受け入れるという側面から「開発」を位置付け、国際人口移動と開発に関わる論点を整理している。結章「グローバリゼーションと開発ガバナンス」はグローバル・レベルに出現している開発課題を領域横断的に整理し、「経済」、「制度」、「政治」、「文化—社会」の4つの課題領域・分野と「グローバル」、「リージョナル」、「ナショナル」、「ローカル」の4つの課題出現点による「課題マトリックス」（表13-1）と政策提言をまとめた「政策マトリックス」（表13-2）を提案している。

開発研究の授業では出身も専攻も多様な学生が共同で参加することが少なくなく、そのような多様な学生が共同で討論するのに適しているのが本書のテーマである「グローバリゼーションと開発」である。本書は専門的な事項は囲み記事にまとめ、様々な背景を持つ読者でも通読できるように配慮されており、開発研究科での教育経験が生かされた書物である。

（アジア経済研究所開発研究センター）